

文化庁「平成30年度大学における文化芸術推進事業」

主催：秋田公立美術大学

AKIBI 複合芸術プラクティス

『旅する地域考 -秋田と構想する冬編-』

「AKIBI 複合芸術プラクティス 旅する地域考」の後編となる『冬編』は、秋田県五城目町を拠点として、参加者が各自の「旅」を構想・提案することに取り組むワークショップと集中講座からなる合宿形式のプログラムです。バックグラウンドの異なる参加者は、国内外のゲスト講師とともに「地域におけるアート」そして「アートにおける地域」のあり方について、旅人の自由な視点から再考を試みます。その作業の手がかりとして、厳選した複数のスポットを巡り、地域で独自の技能・思想・ネットワークを持ち活動する文化実践者を訪ねるなど、「旅人を受けとめる器＝地域」に着目していきます。

<プログラムの特徴>

- ① 雪深い冬の秋田に「逗留」し、旅の企画を構想する
一つの地点にしばらく滞在する「逗留」も旅の在り方としてとらえ、移動によるものとは異なる視点、そして他者と場所を共有し「籠もる」ことで育まれる多様な複合的なアイデアを共有します。1週間の滞在期間中に、前半は集団でフィールドを巡る現地講座、後半には参加者相互の構想を深める対話型のワークショップを実施します。
- ② 旅人が持ち込む多様な情報と可能性が交差・複合するプロセスを経験する
本プログラムでは、旅する場所とそこに生きる人々（地域）を「旅人を受けとめる器」と位置付けます。国内外から集うワークショップのメンターやファシリテーター、そして参加者各自が持つ経験や活動領域の異なりを、相互に影響を与え合い視点の変化を促す対話的な作業により乗り越えつつ、そこで得られる領域複合の視座から「アート（旅人） - 地域（器）」の関係の可能性について考察します。
- ③ 次なる旅を AKIBI がサポート！
本プログラムの最終日には、参加者が構想・制作した各自の「旅」を自由な形式で発表します。ここで言う「旅」の定義は広く、アート作品、イベント、コミュニケーション・システムや地域への提案など、アートと地域、双方の立場から考察されていることが求められます。プログラムの終了後にも実施を目指して継続される具体的なプランがあれば、秋田公立美術大学大学院「複合芸術研究科」が積極的にサポートしていきます。

<プログラム>

- (1) 【現地講座】 集団で逗留し、巡る
2019年2月10日(日)～12日(火)秋田県五城目町、三種町、北秋田市根子ほか
五城目町を旅の拠点に、参加者全員、講師陣がともに地域を巡るショートトリップ。訪問する現場で地域ゲスト及び講師によるレクチャーを行い、本プログラムのコンセプトに関連するいくつかのキーワードが提示されます。
- (2) 【個別フィールドワーク／制作】 自分の旅を企画し、旅する
2019年2月13日(水)～15日(金)五城目町内
各自のプランに基づいたフィールドワーク、メンター／ファシリテーターとの対話やコミュニケーションを通してアイデアを深め、プランニングや制作を発展させます。
- (3) 【プレゼンテーション】 旅の成果を、未来のプランに繋げる
2019年2月16日(土)五城目町内
旅の成果および各自の構想を自由な形式で発表したのち、フィードバック、ディスカッションによって構想をブラッシュアップします。

<募集要項>

募集対象：

- ① 大学生・大学院生（学部や専攻は問わない）、アーティスト、デザイナー、行政関係者（地域おこし協力隊なども含む）、NPO 従事者、メディア関係者（新聞記者、編集者、テレビやラジオ局ディレクター、フリージャーナリスト）、など。
- ② 全日程に参加できる方
- ③ 年齢、国籍は問いません。ただしプログラムは日本語で実施します

受講料：

10,000 円（受講料は免除される場合があります。詳細は以下「選考方法」をご覧ください）
ただし以下の費用は自己負担いただきます。

- ・ 自宅からプログラム開催地（秋田県五城目町）までの往復交通費
- ・ 個別リサーチ、および発表等に必要な材料、機材ほか諸経費
- ・ 期間中の食費、滞在費の一部

定員：

10 名程度

選考方法：

国内メンター及びスタッフによる、ポートフォリオ（データで提出いただきます）ならびにスカイプによる面接審査があります。ただし下記の条件を満たす選考上位者は、「ユース・プロボケーター」として受講料の免除等の特典があります。（3 名程度）。

- ① 秋田県外居住者であること
- ② 2019 年 2 月時点で 20 才以上 28 才以下であること
- ③ 今後秋田で活動を展開したいという意思・展望がある。

＊すでに『旅する地域考 秋田で着想する夏編』に参加している場合、条件を満たすものとします（該当する場合①、②は問いません）

特典として、受講料の免除、居住地～秋田までの往復交通費（実費負担相当額。ただし、新幹線グリーン席等を除く）を支給します。

<応募方法>

下記ウェブサイトよりご応募ください。

<https://goo.gl/forms/jePK1jBbNDQARyuD2>

*1 月 22 日あるいは 1 月 24 日にスカイプでの面接を予定しています

<応募〆切>

2019 年 1 月 20 日（日） 24 時 必着

<お問い合わせ先>

MAIL：tabisuru.akita@gmail.com

<運営>

主催：秋田公立美術大学

プログラムディレクター：岩井成昭（秋田公立美術大学）、岸健太（同）

企画運営：小熊隆博（合同会社みちひらき）、柳澤龍（Share Village Project）

<講師>

ゲストメンター：

スラシ・クソンウォン（アーティスト）

1965年タイ王国アユタヤ出身、バンコク在住

現代を代表する美術作家の一人として、欧州、米国、アジア各国の重要な展覧会に出品している。作品は、消費社会と経済にテーマを求めたインスタレーションやパフォーマンスとして表現され、観客の参加による認識を通して、新しい感受性の創造を挑発する。現在、バンコクのシラパコーン大学教授として教育に携るほか、制度にとらわれない自由な教育を実践する「Invisible Academy」を1996年から継続しており、アート以外の組織とのコラボレーションも積極的に行う。Tate Modernにおける個展や、ベニス／ベルリン／台北／リヨンなどの国際ビエンナーレへの参加のほか、日本における紹介の機会も多く、「サンシャワー」国立国際美術館／森美術館（2017）「Happiness」森美術館（2003）「Urgent Painting」金沢21世紀美術館（2001）「The Gift of Hope」東京都現代美術館（2000）などがある。

メルセ・ロドリゴ・ガルシア（建築家、建築理論家）

スペイン王国バレンシア出身、ブリュッセル在住

ロンドンを拠点に活動。アート、建築、理論の交差を基礎として多局的活動をおこなう組織『OrNamenT』の共同運営者。英国建築協会附属建築学校（AAスクール）で歴史と理論を教えつつ、西サハラを対象地とする実験的研究プロジェクト『Unscale Sahara Visiting School』を率いている。プロジェクトでは、法学、哲学、人類学、非ユークリッド幾何学の専門知を援用し、空間認知と社会構造の相互関係について批評的検証を試みている。日本における活動としては、東京工業大学ジュニアフェローとして実施した戦後の実験映画の研究、『OrNamenTTokyo』名義でおこなった複数のパブリックイベント、『24th UIA 2011 World Congress of Architecture in Tokyo』および東京ワンダーサイトの滞在芸術家として実施したワークショップなどが挙げられる。

芹沢高志（アートディレクター）

1951年東京生まれ。神戸大学理学部数学科、横浜国立大学工学部建築学科を卒業後、（株）リジオナル・プランニング・チームで生態学的土地利用計画の研究に従事。その後、東京・四谷の禅寺、東長寺の新伽藍建設計画に参加したことから、89年にP3 art and environmentを開設。99年までは東長寺境内地下の講堂をベースに、その後は場所を特定せずに、さまざまなアート、環境関係のプロジェクトを展開している。とちか国際現代アート展「デメーテル」総合ディレクター（02年）、アサヒ・アート・フェスティバル事務局長（03年～16年）、横浜トリエンナーレ2005キュレーター、別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」総合ディレクター（09年、12年、15年）、さいたまトリエンナーレ2016ディレクター、デザイン・クリエイティブセンター神戸（KIITO）センター長（12年～）などを務める。

金島隆弘（アートディレクター）

1977年東京生まれ、京都在住。慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了後、ノキア社、株式会社東芝、東京画廊+BTAP、ART iTを経て2007年にFECを設立。展覧会企画、交流事業のコーディネート、アーティストの制作支援、東アジアの現代美術の調査研究などを手がける。2011年よりアートフェア東京エグゼクティブディレクター、2016年よりアート北京アートディレクターを経て、現在、京都市立芸術大学大学院美術研究科芸術学博士過程に在籍。京都造形芸術大学非常勤講師、京都市立芸術大学非常勤嘱託員。

中村優（台所研究家）

TEDxTokyo yz 2014スピーカー、2015年から世界各国の次世代リーダーのコミュニティGlobal Shapersに選出され、現在Bangkok HUB在籍。2017年にはWorld economic forumに出席。2018年にSHAPE APACという150人のshapersが各国から集まる国際会議を企画主催。これまで37カ国の台所に立ち、英語とスペイン語と少しのタイ語を話す。編集事務所とレストランで編集と料理を学んだ後、2012年フリーランスに。紙・web媒体での執筆活動に加え、レシピ開発やケータリング、食品関連企業の広報・企画コ

ンサルティングに従事。2013年より「とびきり美味しい」をおすすめするサービス『YOU BOX』、世界中のばあちゃんのレシピ収集開始。2015年、『40creations』を立ち上げる。

秋美教員：

石山友美（映画監督／秋田公立美術大学 景観デザイン専攻助教）

1979年生まれ。映画監督。日本女子大学家政学部住居学科卒業。磯崎新アトリエ勤務を経て、フルブライト奨学生として渡米。カリフォルニア大学バークレイ校大学院、ニューヨーク市立大学大学院で建築、芸術論、社会理論を学ぶ。ニューヨーク市立大学大学院都市デザイン学研究科修士課程修了。在米中に映画制作に興味を持つようになる。監督デビュー作『少女と夏の終わり』は第25回東京国際映画祭「日本映画・ある視点」部門公式出品

岩井成昭（アーティスト／秋田公立美術大学大学院 複合芸術研究科教授）

1990年代から都市の多文化化をテーマに複合的なメディアによる視覚表現を展開。2000年代から、アジアパシフィック・トリエンナーレ、ハバナ・ビエンナーレ、横浜トリエンナーレ等、国内外の国際展に多数参加。地域の環境やコミュニティの調査をもとに、インスタレーション・映像・音響・テキスト・キュレーションなどを複合的に取入れた視覚表現を展開している。2010年から「イミグレーションミュージアム・東京・パイロットプロジェクト」を始動させたほか、近年は、人口減少や移民受入におけるアートの役割について考察中。また秋田では「辺境芸術」を標榜し、アート・プロジェクトを実践している。

岸健太（建築家／秋田公立美術大学大学院 複合芸術研究科教授）

1969年東京生まれ。Cranbrook Academy of Art（米国）修了。シンガポールの複数の芸術教育機関で実験的なデザインスタジオを企画・指導した後、2003年より国内外の都市・建築に関わるプロジェクトの活動拠点として「LWL -Lab for the WonderLandscape-」を主催している。2010年からは、インドネシア・スラバヤ市を対象とした超領域のアーバン・スタディーズの活動に、アートと人文社会科学領域を中心とする現地人材と協働し取り組んでいる。スラバヤでは、現地での活動を企画運営する非営利組織「OHS -Operations for Habitat Studies-」を共同代表。

地域講師：

小熊隆博（ギャラリーものかたり主宰/合同会社みちひらき）

2008年より「ベネッセアートサイト直島」（香川）にて美術施設の運営管理に携わったのち秋田にUターン。16年4月、合同会社みちひらきを設立。人口減少が進む地元・五城目町の築約100年の空き家を改修し、かつて訪問客に開かれた客間および土蔵をギャラリー「ものかたり」（<http://monokatari.jp>）として公開。展覧会、ワークショップ、レクチャー等を開催するほか、書籍、アーティストグッズ、地元職人によるオーダー商品等を取扱う。

柳澤龍（プロジェクトデザイナー／Share Village Project）

1986年生まれ、東京都出身。IT企業を経て3月まで五城目町地域おこし協力隊で活動。村の概念をひっくり返すシェアビレッジプロジェクトの立ち上げや高齢社会をデザインすAkitaAgeLabの設立に参画。1次産業と伝統産業のコンサルティング、高校生と地域の未来を描くソーシャルラボ、秋田公立美術大学アートマネジメント育成プログラムの五城目プロジェクトのコーディネーターなどを担当。2017年より国際教養大学連携研究員。